

# 「著名の無名人」 を訪ねて

一方坂上隆の農業哲学も素晴らしい。「剣道すなわち武士道の《気》を哲学とし、自然を大切にしながら、この土地の中から人間に役立つ農業を育て生産物を生み出す」ということだと話してくれた。

ホームページでも、次のように述べている。

「志布志の郷里に戻って農業をやると思った一番大きな理由は、自然を相手に働きたいと思つたことです。(中略) 剣道の稽古を通じて人間の持つ《気》の存在を感じたことをきっかけに、自己探求や自然の法則などの哲学的な本を貪り読んだ時期があり、その中でどのように生きていくのが自分にとって、幸せなのであろうかということ进行深入考えました。(以下略)」

そして、この世の中すなわち、宇宙が生んだ地球というその一角に誕生した自分の力の如何に小さいかを、しみじみ悟つたという。こうして人間的に成長した彼が困苦15年の末に坂上哲学が生まれた。

ホームページ上では、さらに次のように結んでいる。

「《自分では、どうにもならないくらいに大きな存在の中で、生かされている》と感じながら生きていくことこそが、幸せに繋がるという考えに至りました」そして「それが《自然》であり、その自然に身を置いて、花鳥風月で季節の移り変わりを感ずるようなビュアな心を持つて過ごしていければ幸せかな」と思つたという。

## 農業は《土地そのもの》 ということを知るまで

知事の蒲島は、農業研修生としてアメリカに渡り、毎日カウボーイハット姿の牧童頭に引き回され、農奴のような生活を1年半の間、必死で耐えながら辛酸の苦闘をする中で、坂上のいう《気》を早くも悟つたと言えるだろう。こうして蒲島はネブラスカ大学卒業後、本能的に小さい頃に逆境の中で描いた「政治家になる」という夢が追えるべになり、「その分野で有

名なハーバード大学で一流の研究をしたい」と、秘めたる《気》を感じ、それを実現することが、自分も幸せになることだと思つた。こうして彼は、ハーバードを目指す。

一方の「さかうえ」の社長坂上は、郷里の志布志に戻り農業に手を付けたが、「農業という事業」を興すことの基本は何かを、懸命に考え抜いた。父親と共に作物の品種改良や収穫の時期の調整、そして作付面積を増やす方策などを苦心惨憺、毎日が苦闘の連続だった。農協や地方自治体が催す勉強会や集会等にも積極的に参加し、同じような仲間との交流も深めた。

こうして、徐々に分かつて来たことがあつた。その土地の自然というものを愛することは不可能であり、「自然を生かす」しかないという鉄則である。農業という業は、この鉄則を忘れては成り立たない。だから、焦ってはダメだ。

坂上は、出来れば1、2年で自分の《気》を束らせたいと

思つていた、その頭の切り替えが必要だった。

数々の失敗や経験を積んで、彼は「農業という事業」を経営するには、少なくとも最低三つのことが基本であるということを組み立てていく。

第一は、「土づくり」である。その土地の自然に合致した《土》をつくり読みきること。

第二は、如何にして四季折々の「農業という事業」を、効率的に楽しく行い工夫をするかということ。

第三は、「農業という事業」は事業である以上、経済的に成り立たなければ意味がないこと。

こうした三つのことを、彼は自ら生み出していく。

(以下次号に続く。敬称略)